

2023年12月31日

説教題「もう一つのベツレヘム物語」ルツ記4章11～17節

主任牧師 加藤 誠

「近所の婦人たちは、ナオミに子どもが生まれたと言って、その子に名前を付け、その子をオベドと名付けた」(ルツ記4章17節)

今年のクリスマスイブの夜、パレスチナ自治区のベツレヘムのカトリック教会で、ガザ地区の悲しみに連帯するミサが行われた小さなニュースを読みました。ベツレヘムはイエス・キリストが誕生した村ですが、歴史的にはローマ帝国、オスマントルコ帝国、ヨルダン、イスラエル、パレスチナ自治政府と、次々に支配者が変わる複雑な歴史を歩んできました。今はイスラム教のパレスチナ自治政府のもとにありながらも、パレスチナの中では最もキリスト教徒が多い町だそうです。その記事を読みながら、旧約聖書のルツ記が伝える、ベツレヘムの希望と喜びの物語を想いました。

主イエスの誕生の約千年前、ベツレヘムにナオミという女性が住んでいました。夫と息子二人の四大家族でしたが、大変な飢饉のために東隣の国モアブへの移住を決断します。ナオミの二人の息子はモアブ人の妻をめぐり、一家の暮らしが安定し始めた矢先に、ナオミの夫が亡くなり、あろうことか二人の息子も次々に死んでしまいます。その時代、女性が夫や息子に先立たれることは「将来」をすべて失うことを意味しました。残された道は一つだけ。親族の厚意にすがって生きるほかに、ナオミは深い失意のうちにベツレヘムに戻ります。生まれ故郷に戻った彼女は「もうわたしをナオミ（快い）とは呼ばず、マラ（苦い）と呼んでください」と語ったほどでした。

ただナオミは一人ではありませんでした。実はナオミはモアブを出る前、息子たちのモアブ人の嫁二人に「あなたたちは若いだからモアブに残って新たな嫁ぎ先を見つけなさい」と諭し、一人は泣く泣くモアブの地に残ったのですが、もう一人の嫁ルツだけはどうしても一緒にベツレヘムに行くと言ってききません。ルツは「あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神、あなたが死ぬところで私も死にたいのです」とまで言って、ナオミと一緒にベツレヘムにやってきたのでした。ルツは不慣れた異国の地で「落穂拾い」をして懸命にナオミとの生活を支え、やがてボアズという男性に見染められて結婚します。そして二人の間に男の子が生まれて、ナオミとルツ、ボアズたちは、ベツレヘムの人々から大きな祝福を受けたのが今朝の場面です。将来の希望を根こそぎ奪われて深い失意の中にあったナオミに男の子の孫が与えられたというお話ですが、ただのハッピーエンドではありません。そこには新約聖書のイエス・キリストにつながる深い意味、メッセージが込められたのです。

旧約聖書はイスラエル民族の歴史と信仰が紹介されている書物ですが、実はその信仰は「一枚岩」ではありません。例えば、異民族に対して非常に排他的で厳しい見方

が大勢を占めているものの、少数ではありますが異民族に寛容で一緒に命を分かち合っているという信仰も記されています。申命記には「混血の人は主の会衆に加わることはできない。アンモン人とモアブ人は主の会衆に加わることができない」(23:25)、エズラ記には「この地の民からも、異民族の嫁からも離れなさい」(10:11)と厳しく語られているのですが、それに対してルツ記は「正反対の信仰」に立ちます。「あのダビデ王の祖父オベドはモアブ人の女性ルツを通して与えられた。民族が違うからと排除し、差別すべきではない。民族が違っても一緒に神さまに仕え、一緒に将来を望み見ていく道が拓かれているのだ」と。ルツ記は旧約で最も小さな書物の一つでありながら新約聖書のイエス・キリストにつながる大切な信仰を伝えているのです。

主イエスが生きられた時代も、宗教指導者をはじめ多くの人たちは異民族への差別意識を根強くもっていました。エルサレム神殿は、神さまを一番近くで礼拝できるのはイスラエル人の男性、その部屋の外にイスラエル人の女性、異民族の人々はさらに神殿の外の庭までしか入れない…と決められていました。それゆえ、主イエスの弟子たちも異民族の人々と一緒に食卓を囲むことを躊躇している様子が新約聖書にも記されています。しかし、その中にあって主イエスは十字架においてすべての隔ての壁を打ち壊されました。「もはや男も女もなく、ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由な身分の者の区別なく」(ガラテヤ3:28)、誰もが一緒に神を礼拝する道を開かれたのでした。その主イエスの誕生から千年も前に、主イエスの福音につながり、ガラテヤ書のパウロの告白につながる、小さいながらも希望と喜びの物語、もう一つのベツレヘム物語を、ルツ記は私たちに伝えてくれているのです。

それにしてもなぜルツは、ナオミについてきたのでしょうか。モアブ人に対する差別意識の強いイスラエルの地に移り住む大きなリスクが予想できたはずなのに…。わたしはルツが「夫を失った悲しみ」においてナオミと深くつなげられていたからではないかと想像します。「悲しみ」には、人と人をつなげて新しい共生の希望に導く力があるのです。悲しみを共有し、共感するところに神さまは働いてくださるからです。年老いたナオミを独りにすることができなかったルツ。そのルツの献身的な姿勢に次第に心を開かれたベツレヘムの人たちはやがて「民族が違っても一緒に生きる希望を見つけて喜んでいく道」に導かれていきます。「混血の子オベド」の名は「仕える」という意味です。民族や文化が違う者同士と一緒に生きていくことには多くの労苦がありますが、違う者同士だから敵対するのではなく、違う者同士と一緒に神を礼拝し、仕え合い、一緒に将来を望み見ていく道を、「混血の子オベド」はその存在をもってあらわしたのです。やがてオベドの命はダビデに、そしてイエス・キリストにつながっていきます。私たちもルツ記が伝える「もう一つのベツレヘム物語」に込められた共生と希望と喜びのメッセージを受けて、新しい年に向かっていきましょう。